

[恋心を灰にして埋める]

思いがけない眩しさに、反射で目を細めてしまう。午後を微睡むのに、この陽射しは少し強過ぎるように思えた。折角晴れたのだから、と、久し振りに日向ぼっこ一式を持ってバルコニーに出たものの。

逆に汗をかいて風邪をひかないようにしなければ、と、ブランケットはそっと脇に丸めた。肌触りのいい風。雨上がりの日中には湿っぽさを感じさせない空気だった。

ぼうっと景色を見遣る。

何の気もない、ただの息抜きのつもりだった。

無意識に吐き出した息は、重くとも、ゆるりと穏やかさに溶けていく。

たいせつに想う人がいる。色んな大切を煮詰めて、ぎゅっと、「たいせつ」ときれいな言葉で表したいような、たいせつな人だ。

その人の終の宿り木になれたらいい、と淡く思っていたのは、少し前までのことで。

今は、到底そうだとは思えなくなってしまった。

何故なら。

部屋の中の点けっぱなしのテレビから、歓声が湧く。見る意思が無くとも無意識に、顔はそちらを向いていた。あの人達のインタビューの、もう何度も何度も見たシーンだ。あの人が笑う、一緒の彼も笑っていた。

そして、彼が、あの人にその言葉を掛けた時。

(――ああ、私では、)

知らず、ゆらり、目を逸らしていた。

詰まっていた息を、そっと押し出す。いたみを、目蓋の内に覆い隠した。

メディアでも、その話題は盛り上がりを見せていた。

話している彼ではなく、その言葉を受け取るあの人を映していたカメラマンは、きっと知っていたのだ。あの人、普段は見せないそんな瞳の色を持っていることを。現場のプロだからこそ捉えたいと思っていたのだろう。

そして、あの人の子達のファンの子達の反応も紹介されていた。「びっくりした」「ギャップしんどい」「さすがカメラマンさんよく分かってる」――

さすが、よく分かってる、か。

日向に座り込み、今度こそ膝を抱えて顔を伏せる。

現場に、今まで行ったことはなかった。

単純に心配されてのことだけだと思って大人しくしていたけれど、そうではなかったのかもしれない。多分だけど、多分――隠されていた、かな。

よく分かっている……知っている、つもりだったのだけれど。淡く「これから先」を想っていたくらいには。

本気で欲しているのが分かる、苛烈さをまあるく灯した、獰猛な瞳。

私では。

(彼のその瞳の色を引き出すことは、出来なかったな。)

春の名残のような人だった。やわらかでいて、時折さみしそうな色を覗かせながらもあたたかな瞳で笑う。

――「私には」、ただひたすらに、おだやかな春の名残のような人、だったのだ。

*

何か暑い。

ぼんやりと。ああ、あのまま寝ちゃったかな、と思い当たりながらゆっくり目が開く。そしてすぐに気付く、ブランケット放っておいたはずなのに何か包まれている暑い。

動こうとしたら、抱き込まれているようで。身じろいだことに反応してか低く呻く背後に声を掛ける。

「ナオくん、暑いよ」

「……かぜ……ひく……」

「うーん今日暑かったんだけどそうだよね知ってた」

連絡無くうちに来る時は、そういう時だ。疲労で周りに目が行く余裕が無い時。

でも取り敢えず、陽が落ち始めた外のバルコニーより、室内で寝せてあげた方がいいのでは。動かない身体に、そっと言葉を重ねる。

「ナオくん、ごめんね。でもお部屋で寝よ、夜ご飯には起こすから」

「へや」

「ん？」

ぎゅ、と。お腹に回っていた腕に、力が込められる。振り向けないので顔が見えないが、寝起きということだけではなさそうな、何だか不満気な声音だ。

「……昨日の番組、ずっと流してるの？」

「……ああ、」

点けっぱなしのテレビのことか、例の録画を回しっぱなしにしている。……で、この反応は、やっぱり、そういうことか。

ちょっと迷った。けれども。

「……私じゃ、駄目なんだなあ、と思って」

「ああー————ほらもう絶対そうなると思ったくっそだから嫌だったんだ……！」

「くそ？」

「こら」

「あ、はい」

いや言ったの君だが。との思いは吐き出さないでおく。空気読む、大事。

それよりお腹のぎゅっぎゅが強くなったのがちょっと。

「ナオくん、」

「どっち？」

「ん？」

額を項に擦り付けながら、唸るように問うてくる。暑さを訴えるのは諦めていた。このたいせつな人の、何かおかしくなっているメンタルケアの方を優先しなければ駄目だろう。振り向けないからせめて首を傾げて、頬をその頭に寄せる。

「……怖いじゃなくて、駄目なんだなあの方が上？」

「……ああ、そういうことか。」

そういうことか。

えっ、そういうこと？ そういうことか？

「ああ、……うん、ふふ、そうなの？」

「笑わないでよ僕ずっと頑張ってきたのに本当もう……！」

「うっふふ、そっかあ。ごめん、あのさ、正直すごく落ち込んでたんだけど、今はもう嬉しい」

「はぁ—————、」

ごめんね。

腕の強さの割に、そっとそっと零すから。本当にだいじなことみたいに零すから。

「隠されていたんだな、とは気付いたんだけど。そういうことだと思える程自惚れてはなかった。君のことをよく知っていた自信があったから余計にそう思えなかったというか」

「ごめん、でも、傷付かないで自惚れててよ。もうやだ来てよかったあのさあ、」

もう隠さないけど。

寄せていた顔に手が添えられる。

(——ああ、でもその瞳はまたちょっと違う気がするけど、)

埋葬の必要は無くなったようなので、灰にするのは止めよう。

【偲ぶれど花を撒く】

*

『花にて埋葬』

2,247 文字。